

Yachting Monthly

EST. 1906

YACHTING
MONTHLY

堀江謙一「100歳で太平洋をヨットで横断したい」



Nic Compton

May 25, 2023

彼の年齢を感じさせない偉業は伝説となっているが、穏やかで控えめな堀江謙一は、どのようにしてヨットの大志を果たしたのだろうか？



これは、ソーシャルメディアで話題になるパズルのようだ：堀江謙一は、単独無寄港で太平洋を横断した最年少・最年長の記録を保持している。そんなことが可能なのか？　そして、その答えは、彼がそれを成し遂げた唯一の人物だということではない。正解は、彼が1962年に23歳で初めて太平洋横断(単独・無寄港)に成功し、それを成し遂げた最初の(つまり最年少の)人物になったということだ。そして2022年、83歳で再び太平洋横断を達成し、その最高齢記録となった。両方の記録を保持することは並外れた偉業であり、おそらくそれ自体が記録なのだろう。

しかし、それだけではない。この2つの画期的な航海の間に、堀江謙一は地球を3周(西回り、東回り、縦回り)し、さらに太平洋を7回横断している。その過程で彼は、ペダルボートによる最長の旅程、太平洋横断の最小帆船、ソーラーボートによる太平洋最速横断など、さまざまな記録を打ち立ててきた。

彼は日本でも有名になり、世界中のセーリングファンの間でもその名を知られるようになった。今回の記録と共に彼の生き様は、アメリカ・クルージング・クラブ・オブ・アメリカからブルーウォーターメダル賞の受賞に導いた—これは、日本とアメリカを往復する航海に人生の大半を費やしてきた彼にとっても、特別な賞である。



1962年、わずか23歳で太平洋を横断し、マーメイド号でサンフランシスコに到着した堀江。

野心的な出発

堀江健一は、日本の南岸に位置する大阪で生まれ、家族でヨットにのる習慣はなかった。堀江家は自動車部品工場を経営しており、彼の最初の仕事は稼業の営業マンだった。大学在学中に「面白そうだから」とヨット部に入り、アラン・ボンバルやジョシュア・スローカムといった海洋冒険家の記事を読み始めた。しかし、その情熱に火をつけたのは、しかし、彼の情熱に火をつけたのは、最初のOSTARの発表だったようだ。



1962年、初の単独太平洋横断で注目を集める

「『小型船で世界の海を制覇する』時代がすでに始まっていることに驚きました」と彼は語る。「ソプラニーノ(1953年にエラムとミューディが大西洋を横断した全長19フィートの船)とトレッカ(ガズウェルが1950年代に世界一周した全長20フィートの船)はどちらも小型の帆船ですが、大西洋を横断し、周囲を航海しました。したがって、太平洋横断は大西洋横断よりも少し時間がかかりますが、可能性は十分にあると感じたのです。」

そこで彼は、デザイナーの横山明から19フィートの合板製のささやかなスループの設計図を購入し、大阪の造船所で建造させた。彼がボートにマーメイドと名付けたのは、単に、それが彼の帆をスポンサーしていた繊維会社のロゴだったからだ。そしてその後、60年間、彼はさまざまな航海の冒険で航海した十数隻の船のうち、1隻だけ除いて彼の船はマーメイドの名前が刻まれることになる。

強気で無口なタイプ

今、堀江謙一に会うと、このような大胆な冒険をするには物静かで穏やかすぎると思うかもしれない。でも彼は23歳の時でさえ、日本が危険すぎるという理由で彼にパスポートの発行やアメリカの通過の所持を拒否しても、堀江はとにかく行ってしまった。彼は決心の固い人のようだ。

彼は1962年5月12日に日本を出発し、94日後にサンフランシスコに到着、太平洋を単独無寄港で横断した最初の人物として歴史に名を刻んだ。しかしアメリカの入国管理局にとって、彼はパスポートもお金も持たずに入国しようとする不法移民にすぎず、彼は逮捕された。市長が介入し、30日間のビザを発給するだけでなく、彼をサンフランシスコの名誉市民とした。

アメリカでの彼の評判はセンセーショナルで、やがて彼が飛行機で日本に帰国したとき、当局は起訴の脅しを取り下げ、堀江は国民的英雄として歓迎された。

この航海を題材にした本がベストセラーに、そしてそれを描いた映画のヒットにより、人々の意識の中に堀江は国民的英雄として根付いた。それ以来、彼は大胆で、しばしばありえないような航海やスタントを繰り返し、"日本で最も有名な外洋ヨットマン"の称号をうけ続けている。



ウイスキーの樽を再利用した船、モルトのマーメイドIII号で大阪から太平洋を横断し、2002年にサンフランシスコに到着した。

不屈の精神

その始まりは1972年、24ftのマーメイドIIで(東回り)世界一周に初挑戦したことだった。だがボートが破損し、堀江は日本の沿岸警備隊に救助されなければならなかった。だがそれに臆することなく、2年後29ftのマーメイドIII号で世界一周の”逆”ルート(西回り)を航海し275日間という新記録を打ち立て、日本人初の単独無寄港世界一周を達成した。

彼の航海歴はそんなところで終わるはずもなく、1978年から82年にかけて、34フィートのアルミ製ヨット”マーメイド”で「垂直」世界一周を段階的に達成したのである。この時は妻の衿子も航海のほとんどに同行し、北極、南極だけではなく、北米、南米を訪れ途中10の港に立ち寄った。途中、ヨットが転覆し船が元にもどるまで10分から20分間倒立という、あわや絶体絶命の災難に見舞われたが、堀江は今でもお気に入りの航海としている。



堀江は2022年に太平洋を単独無寄港横断した最高齢のセーラーとなり、アメリカ・クルージング・クラブから名誉あるブルー・ウォーター・メダルを授与された。

この1つの例外を除けば、堀江は通常1人で出航する。「複数のクルーで帆走するよりも、単独で帆走する方がハードルは高いと思います。」と彼は言う。「私の基本的なセーリングの原点と信念は、世界最小のヨットで世界の広大な海を航海することです」。彼の最初の著書である "Kodoku" : sailing alone across the Pacific "の中で、彼は単独で航海する別の理由を述べている。「乗組員が最も重要である。ただ最高の乗組員を探したら、それは彼自身であった」と。

しかし、堀江はかなりの経験を積んでいるにもかかわらず、1960'年以降に盛んになったシングルハンド・レースにはほとんど出場していない。唯一の例外は1975年から1976年にかけての太平洋横断シングルハンド・レースで、彼は3位に入賞している。

真のエコ戦士

1985年以降、堀江の航海の多くは、代替エネルギーのテスト(ソーラーボートによる2度の太平洋横断を含む)、あるいはリサイクル素材の広範な利用によって、環境に対するメッセージを発信してきた。

さらに彼は1999年、528個のビール樽を端から端まで溶接して作った33フィートの双胴船で太平洋を単独横断し、これを新たなレベルに押し上げた(空の樽は500個だけだったと彼は冗談を言った)。マストはアルミ缶をリサイクルしたもので、帆はペットボトルをリサイクルしたものだ。—そのテーマはその後の船でも繰り返されることになる。



記録破りな波カボート マーメイドIIIに乗って

その3年後、彼は逆に日本からサンフランシスコまで、古いウイスキー樽の木材で作られ、水素燃料電池を搭載した船で航海した(この時点で彼のスポンサーが日本の醸造・蒸留会社サントリーであったことは驚くことではないだろう)。

「今、人々はリサイクル素材を使い、循環型社会を形成しようとしています。私も社会の一員として、リサイクル素材を使うことで、できる限り環境のことを考えています。自分自身が環境に配慮した行動をすることで、他の人たちが環境に関心を持つきっかけになればうれしいです」と彼は語る。

彼の最も目覚ましい航海のひとつは、2008年にハワイから日本まで太平洋を横断した、波の力で動く31フィートの双胴船、サントリーマーメイドIIでの航海だった。この船には船首に2つのフィンが付いており、波に合わせて上下し、「イルカやクジラの尾のように」船を前進させるものだ。それは目を見張るようなコンセプトであり、彼は、大きなスピードで移動するわけではないとはいえ、長い洋上航海でも実行可能であることを証明したかったのだろう。

3,780マイルの横断中、ボートの平均速度はわずか1.5ノット。そして堀江健一がこの航海を達成するまでに、3ヶ月を要している。「歴史上、人類は風力を発動元として利用してきたが、波力に真剣に取り組んだ人はいなかった。」と彼はAFPニュースに語った。



クルージング・クラブ・オブ・アメリカから荣誉あるブルーウォーターメダルを授与された後

記録更新は続く

堀江は今回の太平洋横断で、原点に立ち返り、19フィートのカッター艇に乗り換えた。サントリー・マーメイドIIIは、近代的なデザインで造られたが、ここでもまたシンプルさが重要で、ウォーターメーカーやエンジンさえも装備されておらず、ソーラーバッテリー1個で駆動していた。しかし、オリジナルのマーメイドとは異なり、ローラーファールリングヘッドセイル、ウィンドベーン、GPA、衛星電話を装備し、スポンサーの好意でウイスキー、ノンアルコールビール、コーヒーも供給された。堀江は1962年と同様、六分儀も持参した。

堀江は今回、西から東へと航海し、サンフランシスコから日本へと渡った。その理由を尋ねると、彼はこう答えた：「暖かいからです。日本からサンフランシスコへの航路では、太平洋高気圧の北側を通らなければならず、寒いのでTシャツを着たいんです。ハワイの2マイルほど南を航行するので、暖かいのです」。

堀江は2022年3月27日にサンフランシスコを出発し、69日後に日本に到着した。1962年の94日間に比べれば、明らかな進歩である。さらに、この時はパスポートとお金を持っており、地元当局に両手を広げて歓迎された。

これで堀江さんの航海人生は終了ですかとの質問に彼は「もう一度やりたい。「100歳になったらね」。

地球のどこかで彼はそれをやるだろうから、目が離せない。この80代の船乗りは、まだまだセーリングブーツを手放す準備はできていない。
